

「...ル...」

ん...なんだろう...

「スバ...」

声？誰かの...

「スバルーー！！！」

「え...？」

大きな声に目を開けると、そこにはティアの顔があった。

「ティア...」

「まったく...何してんのよ。こんなところで寝ちゃってさ。もう降参なわけ？」

「どうして...ここに？」

私の質問には答えずにティアが手を差し伸べた。

「ほら、まだ立てるんでしょ？」

「無理だよ...もう、動けないんだもん...」

それは本当だ。もう、腕が上がらない。

起き上がることさえできない。

「ふう...」

ティアが差し伸べていた手を引いて、横に座る。

その表情はすごくやさしい表情だった。

「...わかった。もう動けないって言うのなら、何も言わない...だけど、みんなはまだ戦ってるわよ」

みんな...が...

「ボロボロになって、傷ついて、倒れて...それでも、立ち上がってる」

みんなが...戦ってる...

「あんたは、そこで寝たままで...良いの？」

でも...もう...

「大丈夫...あんたならできる。ほら...あんたの夢をかなえに...」

ティアがもう一度、手を差し伸べてくる。

私は、その手を握り締めた。

-----

目を開けると、そこにティアの姿はなくて、ただ...空があった。

私の大好きな空。

炎の中から助け出してもらって、連れ出してもらった広い夜空。

冷たい風がやさしくて、抱きしめてくれる腕が温かくて...

助けてくれたあの人が...なのはさんが、強くて、やさしくて、カッコよくて

泣いてばかりで何もできない自分が情けなくて

私はあのとき、生まれて初めて...心から思ったんだ。

泣いているだけなのも、何もできないのも、もう嫌だって

だから、強くなりたかった

苦しくて、悲しくて...助けて、って泣いてる人を助けてあげられるように

強くなりたいって

どんなにきつい状況でも、自分がやらなきゃいけないことがある...それだけで、私は...動き出せる。